

網戸の制作、はじめての就寝、窓ぎわの猫

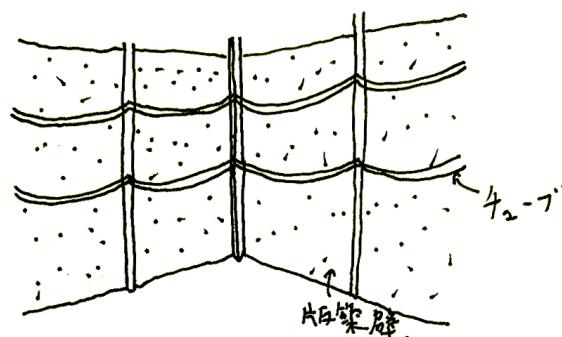
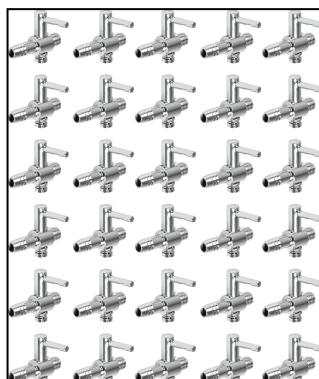
作成者：村上 慧

2025年10月7日

はじめに

8月26日、本堂で初めて眠ることができた。本号ではその様子を中心に、手短に報告します。

8月24日 材料の購入（冷房制作の準備）



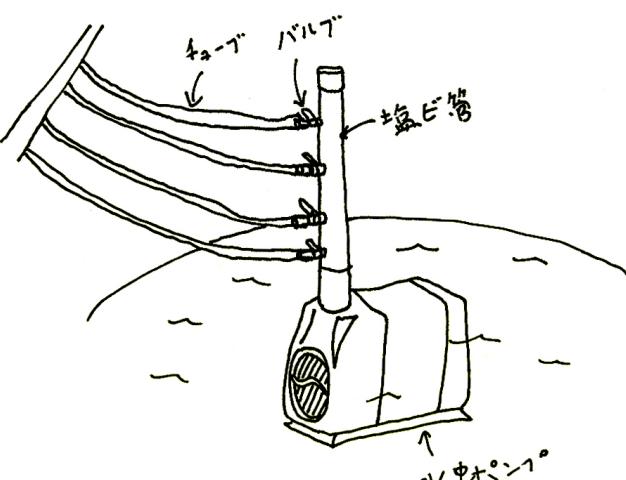
冷房の材料をAmazonで購入した（上写真）。水中ポンプとバルブ（30個入り/内径4mm用）とチューブ（100メートル/内径4mm）。これを組み合わせて「冷房」にする。

これを使って右の図のイメージで冷房をつくる予定。まず水中ポンプに塩ビ管をつなぎ、塩ビ管にバルブをいくつか埋め込む。それぞれのバルブにチューブの片端をねじこみ、そこから伸ばして、本堂の内壁に這わせる。バケツなどに井戸水を貯め、中にポンプを入れ、スイッチを入れると這わせたチューブの穴から水が出てきて、壁に浸透する。さらに壁に扇風機で風をあてるによって水分を気化させ、壁を冷やすことで空間も冷え、冷房になる（といいな）。

購入した道具類はアクアリウム用の商品で、値段も思っていたほど高くない（合計7000円程度）。

ポンプとチューブを使って水を壁に浸透させる、というところ

までは考えられていたのだけど、じっさいどんな商品が適しているかについては、昨年までは検討がついていなかった。そこへ、今年2月に参加した展覧会「筑波circulation計画」にて、アーティストの宮崎竜成さんがこの方法で会場内に水を循環させているのを見かけ、詳細を教えてもらった。宮崎さんがいなければ思いつかなかつた。ありがとうございます。



8月26日



約一ヶ月ぶりに勉強堂へ。トイレの中が植物たちの温室になっていた（左写真/後ほど登場する柚木海音さんによる撮影）。「制圧完了！」といわんばかりの勢いである。ここで用を足すのは諦めた。

この日の最高気温は34度。夏の暑さがピークで、さすがにもう車中泊はできないので、夜までに本堂の室内環境を整えて、寝られるようにしなければ今日の寝床がないという状態だった。至急やらなければならないのは網戸の制作である。現状は窓が十箇所にあいていて、どこからでも蚊が侵入できる。そんな環境で寝るのは嫌だ。

この日は、昨年のG.W版築まつりでも作業を手伝ってくれた北森さんが来てくれた。日向駅で合流し、まずはアーリウスでお昼を食べる。

今回初めて例のインド人シェフに「量をすくなくしてもらえますか？ スモールサイズ、プリーズ」と頼んでみた。シェフは微笑んで頷いてくれたので、伝わったかと思っていたが、運ばれてきた料理は山盛りだった。



網戸の制作、はじめての就寝、窓ぎわの猫

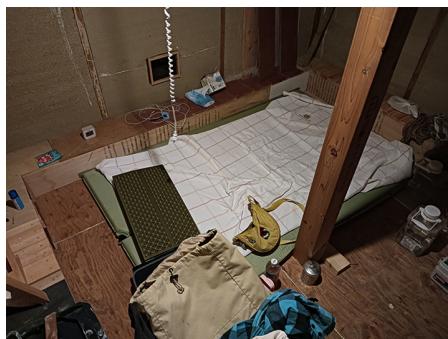
作成者：村上 慧

2025年10月7日

こここの料理はとっても美味しいのだけど、量が多くていつも食べきれない。どうしても。この日も半分くらい残してしまった。「少なくしてほしい」という気持ちを、どうしたら伝えられるのか。北森さんは「ヒンディー語を勉強するしかないですね」と言っていた。まったくそのとおりである。



午後は網戸づくり。10箇所それぞれの窓の大きさを測って木枠をつくり、ホームセンターで買った網戸張り替え用の網をタッカーで打ちつける。これでいちおう「網戸」ができる（左下写真）。それを窓枠にビスで固定していけばよい。版築壁のおかげで室内の気温は外よりはマシ（2～4度くらい低い）だが、それでも作業をしていると汗がどばどば出てくるので、頻繁に休憩をとった。じつとしているだけで、さっきまで滝のように出ていた汗がひいてくれた。北森さんは「暑さにもだんだん慣れてきますね。人体の神秘ですね」と言っていた。暗くなる前に網戸は完成し、窓枠に打ちつけた。北森さんは帰宅。



夜。お風呂から帰ってきて本堂に入ると、自分の家に帰ってきたような感じがあった。これまでにはなかった感覚である。網戸をつけただけで、守られているような安心感が生まれた。網戸があるのとないのとで、空間がぜんぜん違うものに感じられる。ちゃんと「室内」になる。網戸。なんと偉大なる発明か。それまでの蚊帳とは違い、室内空間をまるごと人間のテリトリーにするという革命をもたらした。冷蔵庫や洗濯機に並ぶ発明品だと思う。

ここにきて、ようやく勉強堂が本当の意味で「居場所」になってきた。土地を買ってから三年。百回の草刈りと、千回のくしゃみと、一万回のビス打ちを経て、ようやくこの土地に居場所ができつつある。

寝床をつくる（上写真）。といっても、いつも車中泊で使っているマットを二枚並べて敷き、シーツをかけただけ。車に積んでいた折りたたみマットを枕がわりにした。横になってみると、自分より高い位置から虫の鳴き声が聞こえてくる。これも初めての感覚だった。右耳を下にして横になると、左耳の方から360度サラウンドで虫の声が降ってくる。数としてはスズムシが圧倒的で、他にどんな虫が鳴いているのかうまく聞き取れないほどだった。スズムシの息継ぎのあいまにコオロギの声は聞こえた。うるさくは感じない。「移住を生活する」をやっていたころ、虫の声が耳元で聞こえるせいでうるさくて眠れないということがたびたびあったけど、ここでは程よい距離が保たれている。虫の声のほかにはなにも聞こえない。

天井からぶら下げているキャンプ用のバッテリー式ライトを消すと、真っ暗になる。わずかに、ほんのわずかに室内の空気が動いているのを感じる。窓から風が入ってきているらしい。自分の肌はこんなにわずかな空気の流れを感じできるのか、と驚いてしまった。ほんのすこしでも体を動かすと、じんわりと、わずかに皮膚が汗ばむのを感じる。でも気持ちが良い。とても気分がいい。虫の声と、空気の動きと、土のにおい。蚊のシャットアウトには成功したようだ。

網戸の制作、はじめての就寝、窓ぎわの猫

作成者：村上 慧

2025年10月7日



<とつぜんのコラムコーナー>

以前、勉強堂に電車で向かっていたある日、総武本線のとある駅で停車してから出発するまでの数分間の話。

猫を見かけた。マンションの窓枠の、カーテンと窓のあいだに座ってじっとしている。たまに視線を下にやったり、正面に向き直したりして、窓の外の景色を楽しんでいるように見える。いつもそうやって過ごしているかのような、日常的な落ち着きがある。私はじっと視線を送ってみたけど、最後まで目は合わなかった。やがて電車は出発した。猫と私のあいだにはふたつの窓があった。その間には外気があった。人間関係もこんな感じかもなと思う。誰もがそれぞれの家に住んでいて、窓越しに向きあい、話をしたり、物をおくりあったりして生きているが、相手のことは、窓の外から見える範囲でしかわからない。なにかを頼みたくて、すぐに窓のところまで来てほしいと、外から声をかけるとする。その人が、わかった！と、家の中から応えてくれる声が聞こえる。しかしいつまで待っても出てこない。なにをそんなに準備することがあるのかは、こちらからはわからない。その家の中のことは、その人にしかわからない。もしかしたら本人はすぐにでも出ていったかったのだけど、反対側の窓から隣の人に話しかけられて、時間をとられていたのかもしれない。窓から見える範囲では綺麗に掃除されていて、ほこりひとつ浮いていないような家でも、廊下のつきあたりにある窓のない部屋は何年も捨てていないゴミと整理できていない荷物で溢れています。いくら声をかけても開かない窓もある。ものすごく大きな窓が東西南北すべての壁にあって、いつも全開の家に住んでる人もいるし、廊下に小窓が一つあるだけ、みたいな人もいるかもしれない。こちらの窓と相手の窓の両方が開いている時でないと、話もできない。家と家がすごく近くで、窓ごしにりんごが手渡せるような関係の人もいるし、双眼鏡でやっと見えるような遠くの家もある。その家はいつもカーテンが閉まっている。あかりはついているから、中にいることはわかっているのだけど、窓が開いているところは見たことがない。



8月27日

気がついたら朝になっていた。携帯電話で調べたところ、今日の最高気温は35度。車中泊をしていた頃は、朝8時にはもう暑くて車内にいられなかつたが、本堂ではまだまだ寝ていられる。最高だ。版築の壁は快適だし、目にもよい。見ていて飽きない。土の層の重なりは垂直の砂浜のようだ。囲まれていると、遠い時間に思いを馳せることができる。むかし、両親が連れて行ってくれた海の記憶、足元の岩場をすべるように泳いでいく海蛇のあざやかなオレンジ色……波の音すら聞こえてきそうだ。広さとしては5畳ほどしかない空間なのに、せまく感じない。一層一層にかけられている労力と時間を知っているからなのか、どの壁もすこしずつ色が違っているからなのか、私の中に残っている海が共鳴しているのか。

エアコンのような涼しさはないが、なんとなく体の組成に近い空気が流れていて、空間と体の相性がいい。とにかく居心地がよい。もうだいぶ長い付き合いの、無言の時間が苦痛ではない友人と過ごす時間のような落ちつきがある。つい最近できたばかりなのに。

パソコン仕事が溜まっているので、今日はオフィスワークの日にすることを決め、オフィス（ジョナサン）へ向かった。夜、帰ってきたときの本堂の室温は28.6度。それが30分後には、おそらく私の体温が影響して30.4度まで上がっていたが、湿度は変わらず70%だった。ふつうに考えて、私は呼吸をしているので、湿度も上がってよさそうなものだけど、これは版築の調湿性能によるものなのかな。家に帰ってからもPCを「発電所」から伸ばしたコンセントに繋いで、2時間くらい仕事をしていた。

網戸の制作、はじめての就寝、窓ぎわの猫

作成者：村上 慧

2025年10月7日

仕事中はずっと扇風機をつけていた。寝てるあいだもつけておこうか迷ったが、なんとなく消してみた。しばらくのあいだは少々部屋が暑く感じられて、私は今夜寝ることができるのかと不安になつたけれど、不思議なことに時間が経つにつれて涼しくなってきた。なにか環境の条件がかわったわけでもないのに、である。体内で運動しているいろいろなものが動きを止め、体が別のモードに切り替わっていくような感じがあった。昼間の騒々しさで波打っていた水面が、夜の訪れと共にしずまり、波紋がたたなくなつた湖のような状態になった。気がつけば室温も1度下がっていた。理由はわからない。扇風機で体に風を当てるとか、エアコンで機械的に室温を下げるとか、そういったインスタントな解決法を繰り返していくは気がつきようもない、深いところで涼しさを調整するセンサーが、この体には備わっているのだと思った。そのセンサーのスイッチは、扇風機をつけるとオフになる。最近ハンディ扇風機をよく見かけるようになったけれど、ああいったものが人間の体の機能を低下させている可能性を考えておそろしくなつた。



8月28日

今日は涼しい。外気温30度で室温は28度。湿度も64パーセントと低め。11時過ぎまでゴロゴロしてしまった。お向かいの岡川さんの畑、いまやすっかり荒れてしまつて、植物たちの戦場と化している。悲しい。今日もパソコンで報告書の執筆作業。コメダ珈琲でPCを開いて4時間くらい仕事をしたあと駐車場に停めた車の中でも1時間ほど作業。「みきの湯」へ行って風呂に入り、レストランでチャーハンセットを食べたあとソファで再びPCを開いて閉店時間の23時まで引き続き報告書を書いて本堂に戻つた。

夜は半袖半ズボンでは寒いくらいの気温。天気予報アプリによると24度しかない。夏掛けかなにかもってくればよかつたなと思いながら、車に常備してある長袖シャツを取り本堂に向かう。草が露で濡れている。昨日は濡れてなかつた。日中との温度差のせいか。

本堂の中はむしろ外より暖かくて、「わかってるな、君は」と思った。温度計は26.3度を指している。湿度は昨日と変わらず71パーセント。外の湿度は、いくつかの天気予報サイトによると84~87パーセント。昼間は外より涼しく、夜は外より暖かい。そして湿度は安定している。この安定感が版築の強みなんだろう。最高だ。冷房を作らなくても過ごせるかもしれない。

8月29日

美術作家の柚木海音さんが初めて手伝いに来てくれた。いとう大学のゼミの後輩にあたるので、私のことを「先輩」とか「パイセン」と呼んでくれて、なんかくすぐつたかった。後輩とか先輩とか、そういった区分で人と接することがなくなつてるので、最初は「センパイ」という単語がうまく耳に入らず、聞き流してしまつていたのだけど、何度も呼ばれているうちにそれが「先輩」という言葉で、私のことを指していると気が付いたときは、前世の自分を知つてゐる人間に会つたような衝撃を受けた。

お昼ご飯を「まんまや」で食べた後、本堂の床に座り込んで、ひたすらおしゃべりに興じた。お昼を食べ過ぎて体が重かつたということもあるけど、「後輩」と話すのは楽しかつた。



網戸の制作、はじめての就寝、窓ぎわの猫

作成者：村上 慧

2025年10月7日



お昼過ぎになってようやく立ち上がり、柚木さんには主に草刈りをやってもらい、私は本堂へのアプローチを作る作業を行なった。《広告看板の家 名古屋》のとき制作した、スポンサーのロゴ入りのテラコッタタイルを敷いた。これで勉強堂に久しぶりに来た時に、かきわける草の量が減る。スポンサーを足蹴にするようで若干申し訳ない気もするけど……。

夕方には工具類を片付けて、今回の勉強堂作業は終了。

冷房の実験をすこしでもやってみたかったが、時間切れだった。もう秋になってしまったので、来年の夏に持ち越しである。

